

涙香・ポー・それから

夢野久作

青空文庫

探偵小説作家などと呼ばれて返事を差出すのは、如何にも烏^お漕^こがましい気がして赤面します。けれども元来が探偵小説好きなのですから、ソウ呼ばれますと何がなしに嬉しいことも事実です。

ところで私は今でも探偵小説の定義がわからずに困っているのです。阿呆らしい話ですが、自分の書いているものはドンナ種類に属する小説だろうかと時々疑ってみる事さえあります。そうして漠然ながら、それでも探偵小説に入れられぬ事はあるまい……といったようなアイマイな、コジツケ半分の気持ちで満足して、自分勝手な興味を中心に書いている状態です。

私が一番最初に読んだ探偵小説は、涙^{るい}香^{こう}の「活^{いき}地^じ獄^{ごく}」だったと思います。モット古い記憶にさかのぼりますと私は十歳前後から、読んではいけないと叱られ叱られ新聞を読んでおりましたが、そのたんびに、新聞記者というものは、どうしてコンナに色んな事を探り出すのか知らん。エライものだナアと思って感心していた気持ちなぞが、探偵小説愛好慾の芽生えだったかも知れません。

動物園に行つて、奇妙な恰好をして生きている動物たちの気持ちをアツケラカンと考え

てみたり、郵便屋さんが家々に投げ込んで行く手紙が、どこから来るのか一々たしかめてみたくなったり、千金丹売りや新四国参りのお遍路さんは、どこから来てどこへ帰るのかと、うるさくお祖母ばあさんに尋ねたのもその前後の事でした。

又、尋常科三四年頃、小国民とか、少年園とかいう雑誌があった。科学めいた怪奇談や、世界珍聞集みたようなものが載っておりましたが、これも探偵趣味の芽生えをつちか培ったに違いありません。そのほか少年世界のキプリングもの、磯萍水いそひょうすいや江見水蔭えみすみいんの冒険もの、単行本の十五少年漂流記なども無論その頃の愛読書で、どここの発行でしたか、何々少年と標題した翻訳の少年冒険談が、全集式の単行本によって出ていたようですが、そんなものも押川 春 浪しゅんろうの冒険談と一緒に二十冊ばかり虎の子のようにしておりました。

そのうちに中学に這入はいって涙香ものに喰い付いた訳ですが、そのころ他に探偵小説めいたものは殆んどありませんでした。家庭小説や自然主義小説の全盛期でしたので、もっと深刻なものを要求していた私の読書慾は絶えずイライラしていたようです。「人間の先祖は猿である」という進化論の理詰めを読んでたまらない痛快味を感じたのもその頃の事でした。

ところが又そのうちに中学の三年か四年の頃、少年界か少年世界かでポーの「黒猫」の

意訳を読んで非常に打たれたものでしたが、私の探偵小説愛好慾は、それ以来急激な変調を来したようです。つまり涙香物が浅く感じられて来ましたので、逆にアラビヤナイト式のお伽話ときばなし的怪奇趣味の中にモグリ込んでしまいました。そうして矢鱈やたらに変テコなお伽話を書いて人に見せたり、話して聞かせたりしたものでしたが、誰も相手にしてくれませんでした。一方に私は不勉強で英語が出来ませんでしたので、外国の探偵ものを探して読む勇氣もなく、棠陰比事とういんひじや雨月物語などの存在も知らないままに又もイライラを続けておりますと、そのうちにフトした動機から宗教に凝りはじめました。

で、経典以外のものには心を打たれなくなっていました。

私は信心に凝っているうちに、今まで見た事も聞いた事もない怪奇な世界を数限りなく発見しました。それは自分の心の中の邪惡と、倒錯觀念の交響世界で実に不可思議な苦痛深刻を極めたものでした。謡曲阿漕あこぎの一節に、

「丑満過ぐる夜の夢。見よや因果のめぐり来る。火車に業を積む数。苦るしめて眼の前の。地獄もまことなり。げに恐ろしの姿や」

とあるのはそうした気持ちの一例とでも申しましょうか。

そうして、これは芸術にならないかしらと時々思いましたが、一方にそれは芸術の邪道

であるというような、宗教カブレらしい氣咎めもしましたのでそのままに圧殺しております。

ところがこの頃になつて探偵小説が流行して、翻譯や創作に、そんな性質や意味の芸術作品がドシドシ発表されるのを見ると愈々たまらなくなりました。

そこへ博文館の懸賞募集が出ましたので早速投稿した訳ですが、それが二度目にヤットコサと二等に当りましたのが病み付きで、時々覺束ないものを書かせて頂く事になりました。

考えてみるとこれが直接の動機に違いありません。

ですから私は目下のところ本格物は書けないようです。

一々事実にくつ付けて一分一厘隙のないようにキチキチとキメツケて行く苦しさ、いつも書きかけては屁古垂れさせられて終います。

九大の某教授などはいつでも来い、タネを遣るからと云われますが、ドウしても貰いに行く勇氣が出ません。ヴァンダインの探偵小説作家心得などを讀むと猛然として反抗してみたくりますが、サテ紙に向うと一行も書かないうちにトテモ駄目な事がわかつて憂鬱になつてしまします。

私は探偵小説作家のなり損い^{そこな}かも知れません。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集Ⅱ」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年12月3日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：しず

2001年7月23日公開

2006年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

涙香・ポー・それから

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>